

フーコーとマクルーハンの交点

ー『言葉と物』における古典主義時代の表象の転回を読み解くー

大西 康雄

The Intersection of Foucault and McLuhan:
an explanation on the representational change of classic period in Foucault's "Les mots et les choses"

OHNISHI Yasuo

Abstract

In Michel Foucault's "Les mots et les choses", his description of explanation on the change of representations in 17th century is highly abstract and difficult to understand especially for Japanese readers in the cause of its Japanese translation. In this article, I try to make an easy explanation of his semiological description on representations and meaning for understanding his argument. Foucault argues that in Renaissance era a signifier (a sign or text) represents another signified figure, but in Classic era a signifier represents a signified in the same figure of sign. It means that concept of representation concrete in Renaissance became abstract in Classic era, and that diverse possibilities for interpretation of signs lost in Classic era. I think it suggests that Foucault and McLuhan share same cognition about the changing of interpretative openness from Renaissance to Classic era.

キーワード：表象、記号論、情報メディア、ディスコース（言説）、意味

key words: representation, semiology, information medium, discourse, meaning

1. はじめに

1966年に著されたミシェル・フーコーの『言葉と物 (Les mots et les choses)』(以下、本書から出典を明示する際は、原著はMC、邦訳書は邦訳と略しページ数を付す)はフーコー前期思想の代表作として広く知られている。本書の中でフーコーは、ルネサンス期から20世紀にわたるヨーロッパの学問のあり方を検討する中で、知の在り方を大きく規定する「エピステーメ épistémè」という概念を提起し、これにより学問のあり方や認識の仕方が大きく左右されるとともに、17世紀、古典主義の時代に入る時と、19世紀、近代に入る際に大きなエピステーメの転換があった主張したことはよく知られている。さらに多くの解説書にある常識的説明では、フーコーは、ルネ

サンス期から16世紀までのエピステーメを強く規定したキー概念を「類似 ressemblance」、古典主義の時代のエピステーメを強く規定した概念を「表象 représentation」¹⁾、近代を規定した概念は「人間 homme」とし、さらにポスト近代におけるエピステーメの転回では、近代を特徴づけた「人間」が消え去るのではないかという予測を提示して本書を締めくくったとされる。

しかしながら、難解とされている本書に関して、それ以上に立ち入った内容に関していったいどこまで理解されているだろうか。本書の邦訳は1974年に新潮社から渡辺一民と佐々木明の手によって出されているが、この邦訳書の訳文は極めて難解である。フーコーの議論が抽象度の高いものであることは確かであり、その分、理解が難

しいのは当然であるにせよ、日本人にとってフーコーの本書での議論の理解が難しいのは、実はこの邦訳書による側面が大きいのではないだろうか。本稿では、特に訳文の記述が難解な本書第3、4章を中心に展開される、古典主義の時代を導いたエピステーメの転回における表象の在り方の変化に着目して解釈を施し、解説を試みるとともに²⁾、その情報メディア論との関連について示唆を図りたい。

2. 『言葉と物』に古典主義的表象の転回はどう描かれているか

『言葉と物』では、古典主義的エピステーメの転回について第1部で扱われており、特にその表象に関する議論は、第3章「表象すること Représenter」、第4章「語ること Parler」で主として展開されている。以下その内容を検討していく。

2. 1 ルネサンス～16世紀における表象の在り方

すでに指摘したようにフーコーはこの時代のエピステーメのキー概念を類似 *ressemblance* あるいは相似 *similitude*³⁾ だとしている。そしてこの類似（あるいは相似）の主な形式として、ラテン語の単語を用いて、次の4つの概念を指摘する。モノが隣接して現れる関係を示す「適合 *la convenientia*」、モノ同士が競い合う関係を示す

「競合 *laemulatio*」、モノがその周りのモノと持つ関係同士が似ていること（モノ同士の、見てとれる形が似ていることを意味しない）を示す「類比 *laanalogie*（アナロジー）」、そしてモノ同士を連想させる関係を示す「共感」の働き *le jeu des sympathies* である（MC: 33-9、邦訳: 42-50）。ここで筆者が指摘しておきたいことは、類似が鍵であるとフーコーは主張しつつも、我々が類似という言葉ですぐ思い浮かぶ、見た目の形が似ているということは、フーコーの類似の4つの主要な概念には含まれていないという点である。従って、モノ同士が類似関係にあるかどうかはすぐには分かるわけではない。だから人々は、何らかの特徴 *signature*⁴⁾、手がかり（標識 *marque*）を使ってモノ同士の類似、相似関係を読み解くのだが、結局この特徴こそが記号 *signe* に当たる。この記号とモノとの関係を図示すると図1のようになるが、記号空間は現実のモノ空間を読み解くある種の象徴的イマージュ（イメージ）だと筆者は考える。

指し示す記号と指示されるモノとの関係はアナロジーである。だから例えば犬というモノを示す記号として本来犬自体とは何の関連性もない「犬」「dog」「chien」「개」といった恣意的な文字記号が通用する。モノが別のモノ（例えば、犬と犬小屋、飼い主）と取り結ぶ関係と同様の関係が、そのモノを示す記号と別のモノを示す記号との間に存在すれば、そのモノとそれを示す記号の間はアナロジー関係となる。しかし一方で、このモノの

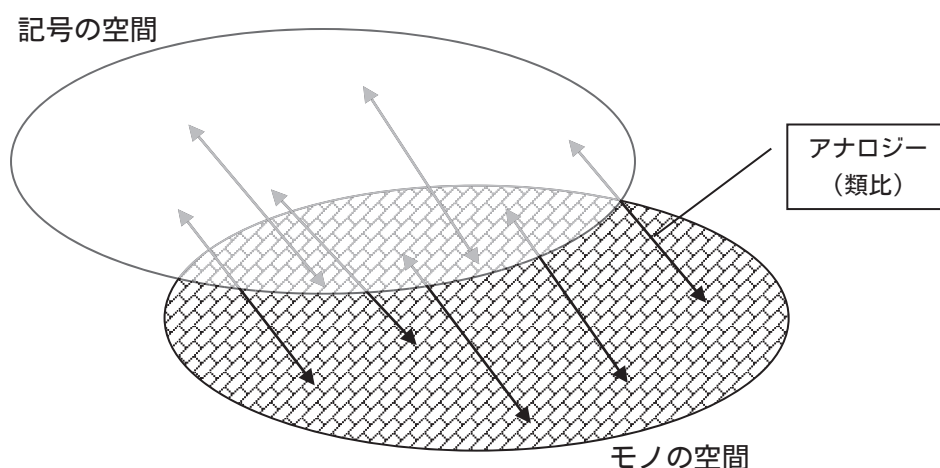


図1 ルネサンス期におけるモノと記号の対応関係(1)

空間と記号の空間は完全に1対1の対応関係が成立しているわけではない。記号は、対応するモノの本質 nature を指し示すにしても、記号の配置とモノの配置は全く同一なわけではない。両者にはずれがある (MC: 44、邦訳: 54)。そのずれや溝 *cran* (食い違い) が、モノに着目しているだけでは生まれない、新たな意味の発見を導き、認識の豊かさを保証する記号空間の豊かさを作り出す一方で、記号の解釈のための労苦も生み出すのである。だが、これらの意味空間の土台は砂のようにもろい。なぜならば、この意味空間は、モノ同士、記号同士、そしてモノと記号同士の類似関係の相互依存関係によって構成されているからである。したがってこの意味空間を確定させるためには、すべての関係が踏破され、確定される必要がある (MC: 45、邦訳: 54)。ということは、どこかこの意味空間の一部分が崩壊してしまうと、全体がドミノ倒しのように崩壊する可能性がある、と考えることができる。そこで、例えていえば、この砂の城のドミノ倒しを防ぐ土嚢として、小宇宙 *microcosmos* というカテゴリーが機能する。つまり大宇宙 *macrocosmos* と小宇宙の関係が保証されているという前提を置くことで、類似関係の探求を小宇宙の範囲にとどめ、砂の城全体の崩

壊を防ぐのである (MC: 46、邦訳: 56 参照)。このように類似の相互依存関係で意味世界が構成されているからこそ、魔術と博識は同時に受け入れられるのであり、しかもその知の空間の布置は極めて精密なものである (MC: 47、邦訳: 57)。この当時の意味世界は、後世の私たちの目には伝説や迷信と客観的知識が混同されているように見えても、意味世界の構成としては必ずしもでたらめではなかったという指摘である。

この時代、ことば *langage* (邦訳では一貫して「言語」という訳語が充てられ、それに「ランゲージュ」と振り仮名が振られているが、本稿では「ことば」という語を充てる)⁵⁾ は、その表象内容 (意味) によって「ことば」とされるわけではない (MC: 50、邦訳: 60)。但し、ことばが神において与えられた起源にあつては、ことばはモノと類似しているがゆえに、1対1に対応する確実に透明な記号であったと考えられていた。それが、バベルの懲罰により、ヘブライ語を除いて、ことばとモノとの根源的な類似関係を失ってしまった⁶⁾。そして、諸言語におけることばは、世界に対して意味する記号であることにとどまらず、世界に対するアナロジー的なイマージュ (模写、モデル) でもあるようになった。だが世界を模写することばの

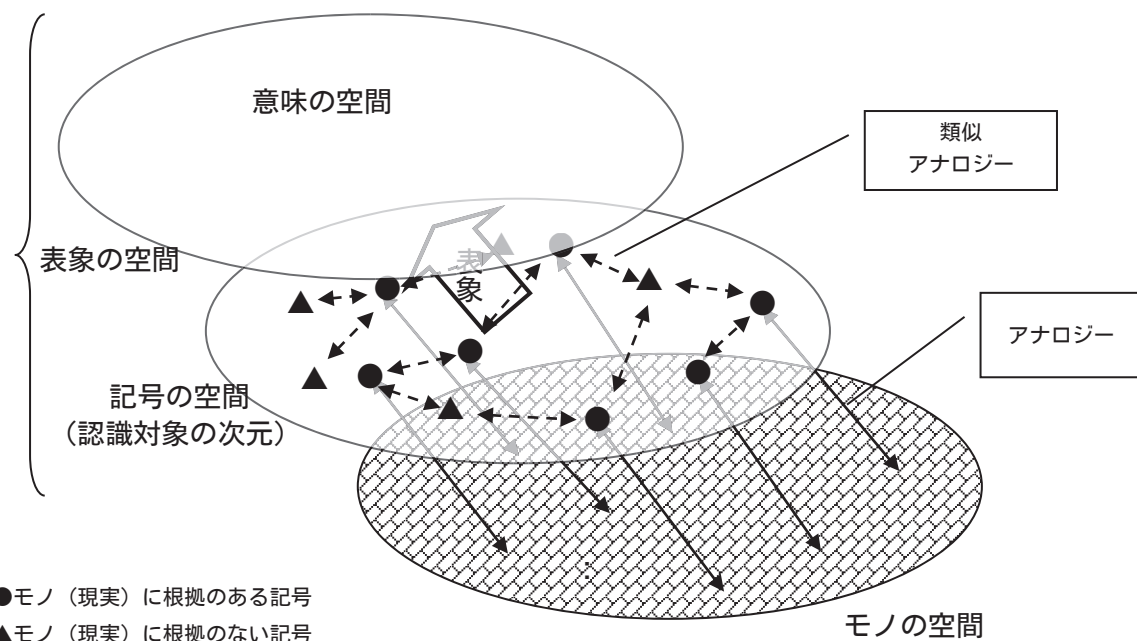


図2 ルネサンス期におけるモノと記号の対応関係(2)

イメージは、もはや語とモノとの1対1の対応を通じた確実性を持つものではなく、ことば（記号）とモノが交錯する意味空間、物理空間を包括した宇宙全体を通じた類似の相互依存関係を通して、世界との対応の確からしさを求めるほかない（MC: 52、邦訳: 62-3）。このような空間においては、ことばもまた確実な意味を持つものではなく、自然と同様探求の対象となる（MC: 50、邦訳: 60）。そのことは、次の事実からも強化される。ヨーロッパにおける印刷術の出現、東方の写本のヨーロッパへの到来、音読や上演を目的としない文学の登場、伝統や教会の権威よりも宗教上の原典解釈の重視等から、ルネサンス全般を通じて書かれたものが絶対的に優位な地位を占めるようになり、それ以降、ことばは書かれたものであることが基本的な性格とされるようにとともに、テキストも神聖化される。そのため観察と読まれたものの、人から伝えられたものが区別されず、その結果、観察されたモノ（の記号）と現実に根拠を持たないことばや記号が交錯し共存する、連続した意味空間が構成される。そして、どのようなことばも意味が確定せずに分裂し、果てしなく蒸し返される注釈によって、二重化dédoublerする（MC: 53-4、邦訳: 63-4）。ここでいう「二重化」とは、例えばあるテキストに対し、解釈をして一旦読み取られた「真意」を示す註釈テキストがまた読み取られようとする、そのような事態を示す。だから解釈学が重要になるのである。今、筆者はフーコーが書いたテキストに対して（しかもそのテキストは一旦、日本語に訳されているが）その解釈を書き記しつつあるが、いわばそれに似た状況であろう。

2. 2 表象の変化から見た、古典主義時代の到来を告げるエピステーメーの転回

しかし17世紀初頭には、ルネサンス期の類似の相互依存関係で埋め尽くされた意味世界は知的世界の舞台ではなくなる。相似はもはや知の形式ではなくなり、むしろ錯誤、取り違えの形になってしまう（MC: 65、邦訳: 76）。そのような類似、相似の地位転落を象徴するのが、セルヴァンテス

の『ドン・キホーテ』の物語なのである。ただし、古典主義時代において類似が退けられたといっても、類似が全面的に否定されたわけではない。より厳密で明証的な形に変わったのである。それが、計量（あるいは、測定）mesureと順序ordre（邦訳では「秩序」との訳語を使用）⁷⁾による比較である。さらに計量は簡単に順序付けに帰着させることができる（MC: 66-7、邦訳: 77-8）。類似が退けられ、より厳密な尺度による比較が知の基本的な形式となった結果、考察や研究の対象となるモノや領域を構成する要素が列挙され、網羅的なカテゴリー化が可能になると同時に、モノ同士の違いや同一性は明確に識別され、確実に認識することが可能になる。この結果、伝聞による物語と学問も分離されることになり、あらゆるテキストが無条件に真理の記号signeや形式として扱われることもなくなる（MC: 69-70、邦訳: 80-1）。なお、類似、あるいは相似が依然比較分析の契機となるという意味では、類似や相似は知的世界から完全に排斥されたわけではなく、その周辺領域にあると言える。但し類似は想像力の領域に属ようになる（MC: 82、邦訳: 93）。

また、記号やことばの表象の在り方も古典主義的転回の前と後で大きく変わっている。16世紀以前には、記号とはまず実在する形あるもの（形象）figureであった。従って（読み取られるべき）未知の記号や無言の標識marqueという存在がありえた（MC: 72-3、邦訳: 83-4）。そして、記号によって示され、意味されている（はずの）モノやことば、それを示す記号となる標識、そして、その標識からそれが意味しているモノを読み取ることを可能にするものという三項が前提とされていた。その最後の項目、記号から意味を読み取ることを可能にするものこそ、類似やアナロジーであった（MC: 78、邦訳: 89）。しかし、記号やテキストの裏にまどろむ（とされる）、記号に先行することが前提とされることば、メッセージを果たしてどう呼び戻すのか、そして読み取られたことばは果たして真正なものであるかどうかの確証は困難である。そのため、その記号やテキストから本来のことばを探り出すために、多くの二次的

なことば language second である、注釈や注解などが付けられていた (MC: 93、邦訳: 103)。つまりこの時代はいわば、書かれたテキストには、簡単には読み取れない真正なことばが隠されていることが前提となっていて、それを注釈や注解などを頼りに、行き当たりばったり、いかに本来あるはずの真正なことばを、掘り起こして読み取るか、というテキストに対する向き合い方をしていったということであろう。暗号のような黙示録から「真正」な預言を読み取るような姿勢であったと言えよう。

それが、類似が退けられた17世紀の古典主義的転回で次のように変わっていく。まず、記号が示すモノとのつながりが、類似やアナロジー等によって保証されているとの前提が失われ、前記の三項構造が崩れる (MC: 72、邦訳: 83)。この結果、記号は実在する形象ではなくなる。というのは、何かを指し示すという表象機能が認識されたものこそが記号とされるようになり、表象機能が未だ認識されない未知の記号や無言の標識といったもの⁸⁾は否定されるからである。そして記号とモノとの関係の確実性や蓋然性は認識に依存する (MC: 73、邦訳: 84)。言わば、記号が実在概念から、認識における分析的、抽象的概念に変わっ

たということだと考えられよう。さらに、記号/表象空間はルネサンス期のようにモノの現実空間のモデル、ずれのある写像とはされなくなり、むしろ現実のモノ空間の認識による分析の結果でもあると同時にモノに対する分析ツールでもあるような存在となる (MC: 74-5、邦訳: 85-6)。これを、内田隆三 (1990: 68) が指摘するように、「物の実在から切り離され、純粋な『表象』の空間として浮かびあが」ったと言っても良いだろう。また、人為記号と自然記号⁹⁾の違いはルネサンス期からすでに知られていたが、当時は自然記号こそが第一義的存在であり、人為記号は自然記号をモデルとして模倣する存在であった。しかし古典主義時代では、人が恣意的に作った人為記号の方こそが、むしろ自由度が高く、モノや自然世界を要素に徹底的に分解し分析することが可能となるような、十分な機能を発揮できる記号を作れる可能性が高いとされ、記号として第一義的なものとなる (MC: 75-7、邦訳: 86-8)。

この結果、古典主義時代では、記号と表象作用は表裏一体のものとして結び付けられた (MC: 79、邦訳: 90)。言うなれば、記号と表象対象は別のモノではなくなり、記号の内に表象が入り込み二重化される se dédoubler ののである。より

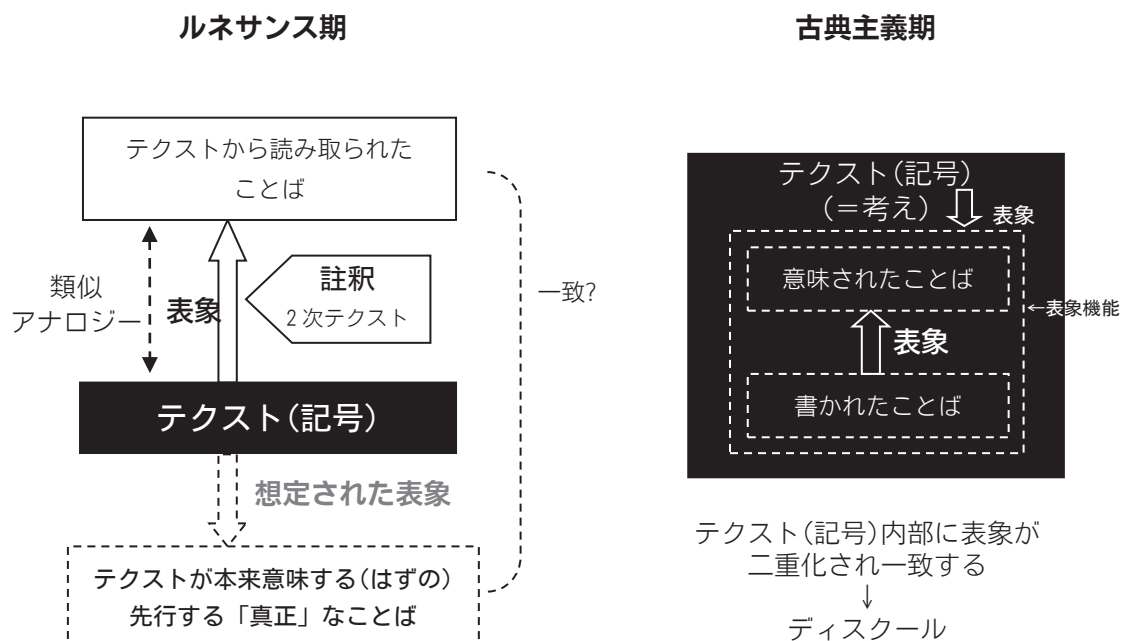


図3 古典主義期における表象関係の変化

詳しく説明すれば、表象には、意味されるもの *signifié* (所記) と意味するもの *signifiant* (能記、具体的に言えば記号それ自体) が存在するが、意味するものは、意味されるものを指し示すだけではなく、それ自身が何かを指し示している、すなわち表象している役割を持つということ自体をも指し示すとフーコーは記す (MC: 78、邦訳: 89)。意味するものである記号は、二つの役割を持つので二重化されるというのである。この抽象的なフーコーの記述を具体的に考えてみよう。仮に意味する記号として何らかのテキストがあったとする。すると、そのテキストは、読み手に何らかのことばや意味や示す機能を持つと同時に、そのテキストの文字列は、単なる模様ではなく、何かを意味するテキストなのだというを読み手に示すという機能を併せ持っている、ということである。逆に言えば、パッと見て何らかのことばやメッセージが明晰に読み取れるからこそ、それが、何も意味しない模様などではなく、意味を持ったテキスト (記号) なのだということが分かるということでもある。ということは、読み手が失われてしまった古代インダス文字などは、このような考えの下では決して記号などではありえない。だからこそ「表象作用の分析と記号の理論とは、たがいに完全に浸透しあっている (MC: 79、邦訳: 90)」ということになるのである。そして表象が記号の中にしか与えられなくなったため、意味作用 *signification* を記号とは区別して問うことはできなくなり、意味作用の理論の可能性を排除することになるとともに、記号分析は直ちに、記号が意味するものの解説となってしまうことになる (MC: 80、邦訳: 91)。これは、記号とそれが示す意味内容との間にいかなる中間的要素も不透明さもないとされるためであるが、平たく言えば、記号に書かれている通りに意味が読み取られるという前提に立つということである。だからこそ、記号がどう意識の中で読み取られるかを問う意味作用の理論も必要もなくなってしまうのである。このように記号＝意味とされた結果、意味は記号の完全な「表 *tableau*」のうちに与えられるはずとされる (MC: 80-1、邦訳: 91-2)。また記号にお

ける意味するもの (能記) と意味されるもの (所記) の二元的理論は、表象の一般理論と結び付けられる (MC: 81、邦訳: 92)。

記号空間も、モノ空間の象徴的イマージュから認識における分析ツールになったため、モノ空間たる自然をどう記号空間の中に秩序付け (違いを識別する、秩序付けられた一種の分類表への割り当て)、分析するかということが課題となる (MC: 86、邦訳: 97)。分析対象たる自然が単純な場合、数学をモデルにした計算可能な演繹的な方法論である「マテシス *mathesis*」に訴え分析する。それと対抗的な方法に、経験的なものの連続から出発していかに秩序が成立するかを分析する「ジネーズ (発生論) *genèse*」 (ある種帰納的に分類体系を考える方法) が存在し、この中間に分類のための記号体系を設定した「タクシノミア (分類学) *taxinomia*」の空間が広がる。複雑な自然、あるいは経験において与えられるような表象一般は、この空間で分析される (MC: 86-7、邦訳: 97-8)。この部分の記述は、現実を分類して分析するツールとしての記号の網 (タクシノミア＝分類網) は、マテシスとジネーズ (言わば演繹と帰納、あるいは先験性と経験性) の両者に起源をもち構成されるが、ジネーズによって構成される比重が高いということを意味しているものと思われる。そして、博物学 *l'histoire naturelle*、貨幣と価値の理論 *la théorie de la monnaie et de la valeur*、一般文法 *la grammaire générale* は、いずれもこの分野に位置づく (MC: 88、邦訳: 98)。なお、古典主義の時代において、自然などの分析対象を分類表に割り当て名を与える場合、重視されるものは観察である。しかしだからと言って、ルネサンス期に比べ古典主義期においてよりよく観察されていたかということ、そうとは限らない。例えば博物学の場合、特に視覚が重視されるのだが、体系的に特定の見える要素のみに着目して観察され、分析、分類される。逆に言えば、それ以外の感覚的要素は無視される。そういう意味では、古典主義期においては、体系的にわずかなものしか観察せずに、経験の場を意図的に制限していると言える (MC: 144-6、邦訳: 155-7)。学

名を考案したことで有名な博物学者リンネ (Carl von Linné, 1707-78) は、数、形、比率、位置に着目して植物の分類を図ったが、色彩も含めたそれ以外の要素は無視した。分類の際の着目点は、器官または要素の「構造structure」とされるが、これによって可視的なものを制限し、濾過し、ことばで書き写すことが可能とされたのである (MC: 146-7、邦訳: 157-8)。フーコーは指摘していないが、「構造」が視覚によって観察可能で、かつテキストとして記述可能なものに制限されたというのも、当時の印刷術の限界に制約された結果である可能性があると筆者は考える。特に色彩が抜け落ちたというのは、当時欧州においてカラー印刷が普及していなかったためではないだろうか¹⁰⁾。

第4章の初めの方に、次のような記述がみられる。《L'existence du langage à l'âge classique est à la fois souveraine et discrète. Souveraine, puisque les mots ont reçu la tâche et le pouvoir de «représenter la pensée». (古典時代のことばの存在は至高であると同時に目立たない。至高であるというのは、語が「考えを表象する」役割と力を与えられたからである)》(MC: 92、邦訳: 102 但し訳文は変更。以下同) 《le langage représente la pensée, comme la pensée se représente elle-même. (考えが自らを表象するように、ことばは考えを表象するのである)》(MC: 92、邦訳: 102) 《Et par là, il (筆者注: le langage classique) se fait invisible ou presque. Il est en tout cas devenu si transparent à la représentation que son être cesse de faire problème. (そしてこのことによって、古典主義時代のことばは目に見えぬもの、もしくはほとんど目に見えぬものとなる。いずれにせよ、ことばが表象に対してまったく透明になったため、ことばの存在は問題とならなくなる)》(MC: 93、邦訳: 103) これらの記述が意味することを解釈すれば、(主として書かれた) ことばはそのまま考えを表わすものであって、同時にことばの(書かれた) 通りにそのことばの意味が読み取れる、ということが前提とされたということであろう。そ

して、誰にでも読み取れる(はずの) 意味の固定されたテキスト/ことばこそが、古典主義時代の「ディスクール(言説) discount」となるのである¹¹⁾。言わば、テキストの読みがルネサンス期の密教的な読みから、顕教的読みに移行したとき、ディスクールが成立したのである。もちろん、ことば通りに考えや意味が読み取れる透明なことば、言わば考え、ことば、意味の三位一体¹²⁾ の成立は、あくまでも古典主義時代のユートピア的観念であって、事実とは異なる (MC: 133、邦訳: 144)。とはいえ、それが目指されたことが重要である。

このような、類似の退潮に伴うテキスト読みの顕教化に伴い、「《註釈》が《批評》に席をゆずったのだ」(MC: 94、邦訳: 104)。そうなった理由は、ルネサンス期にはテキストと、テキストが秘めている(潜在的に指し示す) ことば(の意味内容) は、類似しているとはいえ、形(形象figure)の上では別ものであるのに対し、古典主義期では、「ことば通り読み取れる」との前提に立つので、形象上、意味するものとされるものは同一となった。つまり、前者は形の異なるモノ同士の表象関係であるのに対し、後者は、表象がテキスト内部に重なり二重化されたので、形の上ではあくまで同一であって、その表象関係はあくまでも分析的、概念的なものでしかない¹³⁾。従って、前者においては、テキストを通り一遍読んでみて意味不明であったとしても、ちょうど今、私が『言葉と物』の訳文を目の前に首をひねっているように、そこには何らかの「真正」なメッセージが込められているのではないかと、既存の註釈などを手掛かりに苦勞しながら解釈にいそしんだり、あるいは新たな註釈書きを試みるのに対し、後者においては、テキストを読んでその意味内容が良く読み取れなかったり、あるいは読み取った意味内容に納得がいかなければ、書き方が悪い、あるいは書き表そうとした考えの内容自体がおかしい、ということになるのではないか。言わば神聖だったテキストの地位の格下げが起こるのである。だから、古典主義時代においては、書かれたテキストに対する批評が登場し、それが重要になってくる。ルネサ

ンス期においてテキストの「真正/神聖」さが疑われなかった理由は、モノと記号同士の、類似関係の相互依存ネットワークが成立していたというだけではなく、フーコーは本書の中では必ずしも明言していないが、当時はまずテキスト自体の多くは手写本であり、極めて限定された貴重なものであったこと、さらに、ルネサンス期を支えた知識の多くが十字軍によって東方からもたらされた書籍に依存しており、アラビア語やギリシャ語からの翻訳が重要だったからではないか。特にフーコーが描くルネサンス期のテキストに対する人々の向き合い方は、今日私たちが外国語文献に向き合う態度に酷似している。翻訳の重要性が、音読の補助ツールであったテキストに、それ以上の力を与えたのではないか。しかし、15世紀末のグーテンベルクの「印刷革命」という一種の情報革命により、書籍の流通量が拡大し、識字能力を持つ人が増え、さらにはラテン語文献のみならず、のちに国民言語となるドイツ語、フランス語、英語等による印刷文献の増大が、古典主義時代におけるこのようなテキストに対する向き合い方の変化(テキストの格下げ)をもたらしたと筆者は考える¹⁴⁾。

このように批評が登場してくるのであるが、フーコーは、当時の批評について次の4つの形態をとると指摘している。すなわち、「語」の批評、文法(統辞学)次元での批評、修辞学上の批評、既存の書かれたことばに対する表象関係の

批評である(MC: 94-5、邦訳: 104-5)。フーコーが指摘する最初の3つは、言語学的レベルでの批評であると判断できるが、これは、一時に生じる自分の考えを、いかにそのまま「正しく」きちんと読み取れるように、いかに語を順序付けて並べて表現するか、ということが焦眉の問題であったためと筆者は考える。このことが、一般文法 *grammaire générale* の登場を促したのであろう。従って、まず一般文法は言語記号 *signe verbal* をどのように並べるか、あるいは言語によってどのようにその並べ方が異なるか、という学(文法)として始まり、やがてことばの型 *figure* を扱う文法と、比喩(譬喩) *trope* を扱う修辞学 *Rhétorique* に分割される(MC: 97-8、邦訳: 107-8)。また、語ることと認識することは同一の精神の働きとされ、認識とは、通常のことばより、多少反省的なことばであるとされる。つまり語ったり、明らかにしたり、知ることは同一の秩序に属す行為となる(MC: 101、103、邦訳: 111、113)。古典主義時代の学問が極めてオープンで、素人にも門戸を開放したのは、このような知とことばの密接な相互依存関係(認識=ことば)の結果である(MC: 103、邦訳: 113-4)。

かくて、考え=ことば=意味という表象の三位一体というフィクションのもと、顕教的な新たなことばの意味(表象)空間と新たな知の秩序が成立する。しかし、ことばの意味空間は静的なままではいられない。新たなモノ・コトの出現や新概

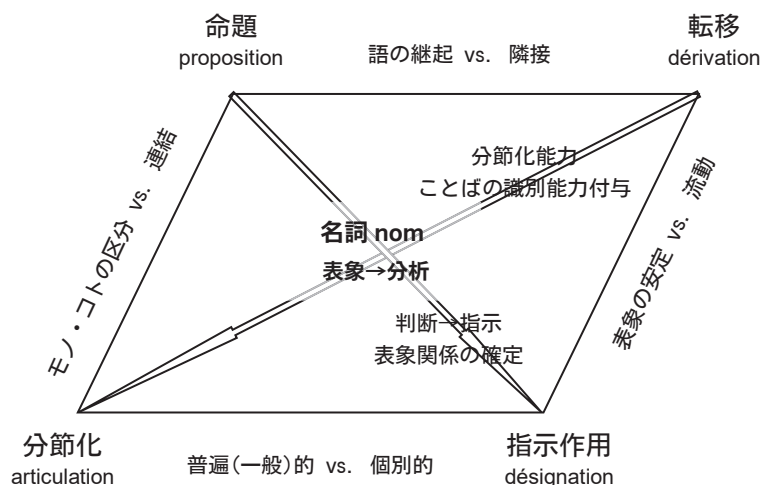


図4 ことばの四辺形

念や観念に対応して、意味空間も拡張・発展が必要である。とはいえ、ことばの意味空間を無秩序に拡張しては、意味を限定、確定させることができなくなる。つまり動と静、意味の拡張と指定（固定）のせめぎあいにあると言える。このようなせめぎあいをフーコーは「ことばの四辺形 le quadrilatère du langage」という概念に取りまとめている（MC: 131 以下、邦訳: 142 以下）。

このうち、意味を拡張するものは、命題と転移機能である一方、指定するのは分節化と指示作用機能であり、これらが相互に対立しつつも共働し表象構造に柔軟性を与えるのであろう。命題とは、A は B である（A est B.）といった、モノを別のモノに結び付ける（主辞＝属辞関係）機能であり、そこには人間による判断が加わる（MC: 109、邦訳: 119）。転移とは、語が、本来の語源から遠ざかり、近い語の意味に転じたり、意味の広がりを変化させたりすることをいう（MC: 126、邦訳: 136）。例えば、フランス語で feuille という単語はもともと木の葉という意味であるが、その意味が転じて薄くてすべすべしたものに広く使われる（例: une feuille de papier 紙片）等である（MC: 130、邦訳: 140）。分節化は現実のあらゆるモノ（やコト）をことばの表象とする作用である（MC: 112、邦訳: 122）。その際、はじめは個々のモノに対し固有名詞で示されていたものを、何らかの共通な要素に着目し、モノの切り分け方、識別範囲を変えることにより、より一般的、普遍的な名詞を作ること（例えば、「タマ」→三毛→猫→哺乳類→動物といった）が、その主たる内容である（MC: 112-3、邦訳: 123）。そして指示作用とは記号が何かを示す（意味する）作用であり、示されたものの記号への代替を可能にする（MC: 119、邦訳: 130）。そして、ことばの四辺形の中心にあって、すべての構造が収斂するとともに、ことばが真実と関係を持つことができる点が名（名詞）である（MC: 133、邦訳: 143）。古典主義の時代におけることばは、分節化された指示作用の仕組みにより、類似を命題的關係の中におさめるのである。またディスクールの基本的任務は、モノに名を付与し、その名においてモノの存在を名指すこ

とである（MC: 135-6、邦訳: 146）。要するに、目に見えるモノ（現実）をきっちり記号、ことば化することを通じてモノ（現実）空間を分析し認識し、表象空間の中に位置づけ固定化していくという一点において、古典主義時代のことばの機能が収斂され、目指される。それが、フーコーの言う「ことばの四辺形」の放散、解体を防ぐピボットの役割を果たしている、ということだと考えられる。その結果、現実根拠づけられた記号やテキストと、根拠づけられない（例えば空想や想像された）記号やテキストとの区別もなされるようになるのであろう。見えているそのままを明解にことばやテキストに表現でき、認識できるとともに、テキストも明解に読み取れる、そんな世界が目指されていたと考えられる。

ところで、多くの解説書は、フーコーの『言葉と物』におけるルネサンスから古典主義への転回に関する記述を、「類似」の時代から「表象」の時代への転換だと解説している¹⁵⁾。しかし、以上のように『言葉と物』における記述を検討してみると、筆者はそのような図式化は適切ではないと考える。結局、フーコーの記述を見る限り、表象レベル（記号→意味空間）で認識が行われているという点ではルネサンス期も古典主義期も変わらない。その意味ではどの時点でも「表象」の時代であるのは変わらないのではないか。ただ、ルネサンス期は、類似がエピステーメの基本原理であったため、モノ（現実）に根拠のある表象とない表象の区別がなされなかったのに対し、古典主義期においては、類似を厳密化した計量化や順序付けによる比較がエピステーメの原理に変わるとともに、表象もテキストと一体化して明解、明瞭なディスクールが成立、さらに表象のモノ（現実）との対応も厳密に問われるようになったということであろう。いわば、ことばとモノとの紐づけが前提とされた結果、逆説的にモノとモノに根拠のないことばが混同され、かえってことばとモノとの対応がさほど問われなかった時代から、ことば（表象）の空間とモノの空間が明確に分離された結果、むしろことばとモノの対応が明瞭かつ厳密に問われるようになった時代への転換だと要

約できるのではないだろうか。あるいは、モノを「類似」で認識する時代から「表tableau」に位置付けて比較し認識する時代への転換と言うべきか¹⁶⁾。

同時に古典主義の時代においては、観察しうるもの、表面的に見えるものの表象が重要であった。しかし、18世紀末に起こった近代への転換では人間が洞察した見えない本質こそが重要になる。例えば、経済学における労働の発見や、表象の外部にある産業の進歩、分業の増大、資本の蓄積等々の概念（MC: 236-7、邦訳: 244-5）、生物学における本質的機能や組織の措定（MC: 239-242、邦訳: 247-8）、言語学における「言語のメカニズム」の措定（MC: 249、邦訳: 256）等、これらの表象外要素こそが本質とされ、目に見える表象はむしろ表面に過ぎないとされる（MC: 250、邦訳: 257）。これら18世紀における転回に関するフーコーの主張に関しては、本稿での検討の範囲外としたい。

3. 『言葉と物』とマクルーハン『メディアの理解』との交点

ところで、フーコーの『言葉と物』におけるルネサンス期から古典主義期へのエピステーメの転回を、表象の変化ということから見てみると、ちょうどその2年前、1964年に出版された、マクルーハンによる『メディアの理解（邦題: メディア論）』における主張との重なりに気づかされる。というのは、以上紹介したフーコーの主張は、ルネサンス期における、表象をめぐる意味の不確定性（最終的に意味の解釈は密教的解読コミュニティに任される）から古典主義期における意味の確定性（誰にとっても意味は同様に解釈され、自明なはずであるという前提）への変化を指摘したと要約することができる。一方マクルーハンの『メディアの理解』は、その内容について様々なキャッチなメッセージ（例えば「メディアはメッセージである」）によって理解されているが、筆者の理解では、その主張の根幹の一つは、メディア解釈の固定化をめぐるせめぎあいであると考えからである¹⁷⁾。

フーコーは『言葉と物』で、ルネサンス期から古典主義期のエピステーメの転回がどのように起こったのかについて分析するものの、なぜそのような展開が起こったかについては直接説明していない。それに対して、マクルーハンの『メディアの理解』においては、筆者の理解によれば、メディアの読み方の変化を説明する中核的概念は、社会編成の在り方の変化である。つまり、ルネサンス期以前の村落共同体的な社会（マクルーハンの用語を借用すれば「部族tribe」社会）から近世、つまり欧州における印刷術普及期以降の前期産業化社会（「機械」あるいは「印刷」の時代）、そして後期産業社会（「電気」の時代）という変化である。これを筆者なりに要約すると次のようになる。「部族」社会におけるコミュニケーションでは、ことばやテキストといったコミュニケーション・メディアの解釈の開放性、ならびにメディアの身体感覚に対する感覚複合性、コミュニケーションの即時性が確保されている、とされる。具体的に言えば、村落共同体的なお互いに顔の見える対面状況の中で、ことばが発せられたりテキストが読み上げられたりすると、単に記号としてのことばが伝えられるだけではなく、表情やジェスチャー、声色等複数の感覚に訴える形で人々に即時に受け取られる。そのように発せられたことばは、人々によって相互に解釈しあわれるので、ことばやテキストは共同体にいる人々によってさまざまに解釈されうる余地（解釈の開放性）を残している。しかしグーテンベルクによる活版印刷術が普及すると、コミュニケーション・メディアの読み方が変わっていく。主たるコミュニケーションは、書籍など文字を通じたコミュニケーションとなる。このようなコミュニケーションは、文字＝視覚のみを通してのみ行われ、対面状況では行われない。従って感覚単一的となり、それ以外の付帯情報は欠落し、かつ即時的でもない。さらに、文字メディアの「線状性lineality」¹⁸⁾という特性も加わり、意味解釈の余地も少なくなる。それが20世紀に入り、産業社会化が進行、高度化して「電気」メディアが普及していく時代に入ると、そのマルチメディア的特性から、メディア

の感覚複合性や即時性が回復され、社会が「再部族化retribalize」される可能性を持つ。その結果、メディア解釈の開放性も回復されるのではない。但し、すべての電気メディアがメディア解釈の開放性を持つとは限らない。そこでメディア解釈の開放性が高く固定度の低いlow definitionメディアをクール・メディア、解釈の固定度が高いhigh definitionメディアをホット・メディアと区分した¹⁹⁾。マクルーハンが主張したことで普及した有名な「グローバル・ヴィレッジ（地球村）」という概念(McLuhan、1964=1987: 94)も、このような「再部族化」社会、つまり技術の力で距離などの物理的障壁を超えた高度化した形による村落共同体的コミュニケーションの復活を指す概念として提起されたのである。「メディアはメッセージである」というマクルーハンの有名なスローガン(McLuhan、1964=1987: 7)も、社会の変化に伴うそれぞれの時代における有力メディアの特性が人々のコミュニケーション感覚を変え、メッセージ解釈の在り方を大きく左右するという文脈でとらえられるべきだと筆者は考える。

こうしてみると、フーコーは表象について、マクルーハンはコミュニケーション・メディアについて論じ、さらにフーコーは主としてテキストに注目するのに対し、マクルーハンは口頭コミュニケーション優位から文字コミュニケーション優位へという、コミュニケーション・メディア自体の変化に注目しているという違いはあるものの、テキストやメディアの読まれ方、解釈のされ方の変化の論じ方は一致しているのではないだろうか。一方は表象という名で、他方はコミュニケーション・メディアという名で論じるにせよ、ルネサンス期においてはいずれも意味解釈の不確定性、開放性が、意味解釈における解釈コミュニティの重要性を浮上させる一方、文字印刷物が普及した古典主義期においては、意味解釈の余地が少なくなったという認識では一致する。マクルーハンは『メディアの理解』の中で、線状性という用語で、メディアが読み手に解釈のストーリーを押し付けてくる傾向を表現しているが、フーコーも『言葉と物』の中で、古典主義時代のことばに

おける順序の重要性を指摘している(MC: 96-7、邦訳: 106-107)。明晰で、解釈の不確定性の少ないことばのためには順序が重要だということを両者とも共通に指摘していると言える。

もちろん両者の主張の力点は異なる。マクルーハンにとっては、感覚複合性の変化と並んで意味解釈の固定度の変化は、メディア環境に影響された人間のものの見方の大きな変化を表す大きな指標である。一方フーコーの主たる主張は、一般的な知の在り方が歴史的に徐々に進化・発展してきたという見方に対し異議を唱え、エピステーメの転回により、過去に大きな知の在り方の断絶があったという点にある。また、古典主義の時代への転換に関しては、伝説や実証されない記述などと観察された事実が明瞭に区別されるとともに、観察が重視される一方、外面的に明瞭に見えるモノのみが対象となった明晰な分析が目指されるということも指摘される。このような明晰な分析や説明が目指される中での表象の変化の一部として、意味解釈の固定度の変化が示唆されるに過ぎない。またフーコーをマクルーハンと対比させることで気づくこともある。マクルーハンは活版印刷術普及以前における口頭コミュニケーションを重視しているが²⁰⁾、フーコーは明らかに書きことばを偏重している。もちろん彼は、ルネサンス期以降ことばは書かれたものが基本的な性格になったと指摘し、基本的にはそれ以降を分析対象にしているのだが(MC: 53、邦訳: 64)、非表音文字である象形文字écriture figurées（あるいは象徴文字écriture symbolique）に対する言及²¹⁾は明らかに勇み足である²²⁾。フーコーはマクルーハンの著書を参考文献にも挙げていないが、とはいえ、両者とも広い意味で人間のものの見方に歴史的に大きな断絶があったのではないかということ、1960年代半ばのほぼ同時期に主張している。説明の仕方や位置づけこそ異なるが、メディアや表象をめぐるおそらく両者は同じ現象を歴史の中に見出したのだと筆者は考える。

注

- 1) 意味するもの(能記) *signifiant*が、意味されるもの(所記) *signifié*を指し示す関係を指す。
- 2) 『言葉と物』に触れたフーコーの日本語による解説書は数多く出されているが、その多くはフーコーの表象の変化に関する議論は重要なものにもかかわらず、奇妙なことにそれについての解説を回避するか、表面的に触れる程度で済ましている。この議論の解説にきちんと取り組んだ数少ない例外として、内田隆三(1990)を挙げておく。
- 3) *similitude*と*ressemblance*はほぼ同様の意味で使われているが、*similitude*はより厳密で学問的というニュアンスで使われている。
- 4) 邦訳では*signature*を「外徴」と訳している(邦訳: 50)。
- 5) なお邦訳では、*langue*にも「言語」という訳語が充てられ、そちらには「ラング」と振り仮名を振ることで*langage*と区別しているが、両者に同一の訳語を充てることは読者を混乱に陥れかねない。「言語」という日本語の単語には、一般的には、ある種のことばを生み出す記号体系全体を示す意味があるが(日本語、英語、仏語等を区別するカテゴリーとしての言語)、本書においてその意味で使われているのは*langue*であって、*langage*ではない。本書では*langage*は*langue*を通して生まれた(記号)表現、メッセージを広く意味しており、「ことば」という訳語を充てるのが適切だと思われるので、本稿ではこの訳語を採用する。
因みに邦訳書では*langage*という用語の説明として訳者による次のような註釈記述がある。「言語(ランゲージュ) *langage*『ラング』とともに『言語』と訳出する語であるが、『ラング』がことばによる表現を可能ならしめる手段の総体であるのにたいして、『ランゲージュ』は、それらの手段の実際に使用されたものとしての言語を意味する」(邦訳: 事項索引39)。よく考えてみれば結局、「ことばによる表現を可能ならしめる手段の総体」としてのラングが「実際に使用されたもの」とは、「ことば」のことに他ならないのではないかと考えられるが、この註釈は、読者に*langage*を*langue*に準ずる概念だとの誤解を与えかねない記述であろう。
- 6) もちろん、この指摘はキリスト教の聖書に基づくフィクションであり、ヘブライ語がモノの世界をそのまま映し出す透明な言語であるというのも事実ではない。ただしこの記述は、本来ならば、ことばは現実のモノ世界をそのまま写し取るものであるべきだという潜在的規範意識を指摘したものといえる。
- 7) 邦訳においては、この部分の記述における*ordre*という語に対して「秩序」という訳語が充てられている

ために、読者を混乱に陥れかねない。フランス語の*ordre*には、辞書的には、順序という意味以外に秩序という意味が含まれているのは確かであるが、ここでは文脈上、順序と解釈することが適切だと筆者は考える。例えば、単純なものから複雑なものへ、あるいは小さいものから大きいものへというような順序付けを指し示しているものと思われる。

例えば邦訳の78ページに次のような記述がある。「計量による比較が、まず分割、ついで共通な単位の適用を要求するのにたいして、いま(筆者注: *ordre*による比較を指す)の場合、比較することと秩序づけることは同一のことにほかならない。秩序による比較は、ひとつの項から他の項へ、さらに第三以下の項へと、『まったく中断されない』運動による移行を可能にする、単一の行為なのである。このようにして、第一項は他のすべてから独立して直観されうる性質のものであり、他の項は相違性の増大する順序にしたがって配列された、いくつかの系列が設定されるわけである」

この部分の原文は以下のようになっている。Alors que la comparaison par mesure exigeait d'abord une division, puis l'application d'une unité commune, ici comparer et ordonner ne font qu'une seule et même chose: la comparaison par l'ordre est un acte simple qui permet de passer d'un terme à l'autre puis à troisième, etc., par un mouvement «absolument ininterrompu». Ainsi s'établissent des séries, où le terme premier est une nature dont on peut avoir l'intuition indépendamment de toute autre; et où les autres termes sont établis selon des différences croissantes. (MC: 67)

邦訳のように、*ordre*を「秩序」と訳してしまうと、この文章は何を言っているのか極めて理解困難である。しかし、*ordre*を順序付けることだと考えると、この文は極めて単純なことを言っていることになる。モノを順序付けるとすれば、例えばより大きいのか小さいのか、より単純なのか複雑なのかというような比較を必ず同時に伴う。従って、*comparer et ordonner ne font qu'une seule et même chose*という記述は極めて自明である。また *la comparaison par l'ordre est un acte simple qui permet de passer d'un terme à l'autre puis à troisième, etc., par un mouvement «absolument ininterrompu»*という記述も、単に、1つ目のモノ(*terme*)から次のモノへ、さらに三番目のモノへと比較しながら順序付けて並べ替えていくという連続的で単純な行為を指しているものと考えられるが、邦訳の記述では何を意味しているのか不明である。本来ならば文字通り *un acte simple* でなければならないはずである。また、*le terme premier est une nature dont on peut avoir*

- l'intuition indépendamment de toute autre という記述についても、順序付けるときに最初に来るモノは、例えば一番小さい、一番軽い、一番単純なモノといったものであると考えれば、それが直感的にわかるというのも容易に理解されるだろう。「順序」も「秩序」の一種であるから全くの間違いではないとも言えなくもないが、解説書等の大半もこの訳語に従っていることも考えあわせると、やはり問題と言わざるを得ない。
- 8) 例えば、解読できる人がいなくなってしまった古代文字などは、これに相当する。但し、それらが例えばエキゾチズムを表象する文様記号として転用されれば、その限りでない。
- 9) 人為記号とは、人間が何かを指し示すために恣意的に定めた記号である。例えば文字や交通信号など、私たちが日常的に使っている多くの記号が人為記号である。それに対して自然記号とは、因果関係や随伴関係など、自然のつながりによって記号として扱われるようになった記号である。例えば、火事を指し示す記号としての煙などが例に挙げられよう。
- 10) 欧州においてカラー印刷が普及したのは19世紀に入ってからである (Hörisch、2004=2017: 160)。
- 11) これを指摘している部分は次のとおりである。Désormais, le Texte premier s'efface, et avec lui, tout le fond inépuisable des mots dont l'être muet était inscrit dans les choses; seule demeure la représentation se déroulant dans les signes verbaux qui la manifestent, et devenant par là *discourts* (それ以来、初めにある「テキスト」は消え、それとともに、モノのなかに無言の存在として潜んでいた単語の、尽きることのない基盤も消える。ただ、表象だけが残り、それを表すことばの記号の中に広がって、それによって「ディスクール」になるのである)。(MC: 93、邦訳: 103。但し訳文変更)
- ここで言う、「初めにある『テキスト』le Texte premier」とは、ルネサンス期において仮定される、目の前にあるするテキストが潜在的に示していると言われる「本来のことば」を指す。
- 12) フーコー自身はこのような表現を使っておらず、筆者の表現である。
- 13) 言わば、ルネサンス期における表象関係は具象的關係であったのに対し、古典主義時代においては抽象的關係になったと言いうるだろう。
- 14) 印刷普及初期 (16世紀) にはテキストの権威を高めた可能性がある。例えば、プロテスタンディズムの勃興に対する印刷物の影響については、Eisenstein (1983=1987: 158以下) 参照。
- 15) 例えば、大澤真幸 (2019: 573)、檜垣立哉 (2010: 77)、今村仁司・栗原仁 (1999: 82-84) など。
- 16) その意味では、図式化するのであれば、桜井哲夫

- (2001: 153-4) の「類似」から「比較 (または分析)」という要約が、類書よりまだ適切だろう。また中山元 (1996: 83) は、知の基準の「類似関係から推論における同一性と相違性」への転換と要約している。
- 17) もう一つの根幹は、コミュニケーション・メディアの感覚複合性の変化である。
- 18) 邦訳書『メディア論』では「線条性」との訳が使われている (McLuhan, 1964=1987: 101 他)。
- 19) 一般にマクルーハンのこの概念については、high definitionが「高精細度」、low definitionが「低精細度」と訳され、テレビの画像解像度のようなものを念頭に置いて、データ量の多寡の問題と理解されているが、筆者は、それは表面的な理解であり、本質的にはむしろ意味の「高決定度」「低決定度」と理解すべきだと考える。その根拠については、大西康雄 (2014: 16-7) を参照。
- 20) 但し、マクルーハンの認識とは異なり、欧州での黙読は活版印刷術普及前の13世紀にすでに始まったと言われ、単純な図式化には注意を要する。Hörisch (2004=2017: 175) およびEisenstein (1983=1987: 99-100) 参照。
- 21) フーコーの、象形文字はアナロジーによって表象の対象と結び付けられていて信頼ができないため、それを持つ社会は学問の発展が困難で歴史的な進歩がないという主張 (MC: 127-8、邦訳: 138) を指す。
- 22) というのは少なくとも、初期の文字は、黙読のためではなく、話しことばの補助ツールであっただろうから、文字特性が社会全体の性格を規定するような主張はいきすぎだろう。また、書きことば優位定着後も、漢字文化圏を見れば、フーコーの主張への反証になるのではないか。

文献 (引用順)

- Foucault, Michel, 1966, *Les mots et les choses: une archéologie des sciences humaines*, Paris: Gallimard. (渡辺一民・佐々木明訳, 1974, 『言葉と物—人文科学の考古学』新潮社)
- 内田隆三, 1990, 『ミシェル・フーコー』講談社
- Hörisch, Jochen, [2001] 2004, *Eine Geschichte der Medien: Vom Urknall zum Internet*, Frankfurt am Main: Surhkamp (=川崎健太郎・津崎正幸・林志津江訳, 2017, 『メディアの歴史—ビッグバンからインターネットまで』法政大学出版会)
- Eisenstein, Elizabeth L., 1983, *The Printing Revolution in Early Modern Europe*, Cambridge: Cambridge University Press. (別宮貞徳監訳, 小川昭子・家本清美・松岡直子・岩倉桂子・国松幸子訳, 1987, 『印刷革命』みすず書房)
- 大澤真幸, 2019, 『社会学史』講談社

- 檜垣立哉, 2010, 『現代思想の現在 フーコー講義』河出書房新社
- 今村仁司・栗原仁, 1999, 『人と思想 フーコー』清水書院
- 桜井哲夫, 2001, 『知の教科書 フーコー』講談社
- McLuhan, Marshall, 1964, *Understanding Media: the Extensions of Man*, New York: McGraw-Hill. (栗原裕・河本仲聖訳, 1987, 『メディア論—人間の拡張の諸相』みすず書房)
- 大西康雄, 2014, 「マクルーハンはデジタルメディアの夢を見たか—マクルーハンの『ホット／クール』メディア概念再構成の試み」『山梨国際研究』9: 11-24